

Centro di Ricerca sulla Pittura Murale Italiana, Università di Kanazawa

Newsletter

金沢大学 フレスコ壁画研究センター

Vol.5

September 2012

◆特集 [南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト]

第6回現地調査:

マッサーフラ、パラジャネッロ、グロッターリエ、ヴェーリエ

◆レポート 洞窟教会に描かれた壁画の「現在(2012年)と過去(1990年)」

◆フィレンツェのサンタ・クローチェ教会大礼拝堂での壁画調査

◆写真展&国際講演会

◆研究者の横顔 第5回

精鋭デジタル計測機器軍団で中世の壁に立ち向かう

◆コラム第5回 私のおすすめフレスコ壁画

カスティリオーネ・オローナでのマゾリーノとの再会

◆レポート

南イタリアの青空に気球を上げて

◆連載 フレスコ八景 第五景

プラート大聖堂の壁画



特集 [南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト]

第6回現地調査：

マッサーフラ、パラジャネッロ、グロッターリエ、ヴェーリエ

2012年1月、第6回目となる南イタリアの洞窟教会壁画の現地調査を実施しました。今回はマテーラからグロッターリエにかけて、凝灰岩台地を深くえぐってタラント湾に流れ込む35本もの峡谷が密集する "Arco ionico tarantino" と呼ばれる一帯を調査地としました。マッサーフラ、パラジャネッロ、グロッターリエ、さらに南のレッチェ近くにあるヴェーリエに点在する15の洞窟教会をリストアップして、プーリア州文化財監督局に調査申請書を出しました。幸いにして、そのすべてが許可されたばかりか、行く先々で郷土史や中世建築の専門家が丁寧かつ情熱的に案内してくれたお陰で、今回の現地調査もまた期待以上の大きな成果を上げることができました。全15の調査地の中から、いくつかを以下に紹介します。



マッサーフラの西側を走るマドンナ・デッラ・スカラ峡谷

マッサーフラ
MASSAFRA



「聖母子」13世紀
マドンナ・デッラ・ブオーナ・ヌオーヴァ教会



サン・レオナルド教会 手前の天井部は崩落
周囲は高い塀で囲まれ、新興住宅街と隔離されている



「デエシス」13-14世紀



異なる調査の視点から観察し、記録する



サンタントーニオ・アパーテ教会



斜光を照射して
ジョルナータの
痕跡の有無を調査



パラジャネッロ峡谷

パラジャネッロ PALAGIANELLO



サンタンドレア教会
教会周囲の凝灰岩を建築用の
石材として切り出したため、
城壁の塔(高さ10m)のよう
に取り残された。テラスのよ
うに見える部分がかつての教会
入口



サン・ニコラ教会の入口



13-14世紀の壁画が残る
サン・ニコラ教会は穴
の底にあり、半壊した
仮設の階段を注意深く
下りて入る



年代推定や壁画に対する画像解釈など、
現地の専門家との議論にも熱が入る



グロッターリエの北側を走るリッジョ峡谷

グロッターリエ GROTTAGLIE



崖下に向かって急な斜面を下りたところにある
グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会



iPadで壁画の色情報を瞬時に簡
易解析 (人間の目には青く見え
るが、解析すると青色顔料は使
われていない!)



ファヴァーナ地下聖堂 天井を含むすべての壁面に14-15世紀の
壁画が残る



ヴェーリエ VEGLIE

iPadで壁画空間を360°
パノラマ画像として記録
(iPadを自由に操るデジ
タル記録技術にイタリア
人の目が釘づけ!)

Report

洞窟教会に描かれた壁画の「現在 (2012年) と過去 (1990年)」

1990年の夏、私が鹿島美術財団の研究助成を受けて南イタリアの中世壁画群を調査してから20年以上が過ぎました。本プロジェクトの現地調査で再訪し、思いがけずに懐かしい壁画と再会できたことは感動というより運命を感じます。抗いがたい時の流れに見る影もなく風化してしまったもの、幸運にも修復の手が差しのべられて環境が整備されたもの、応急手当の修復を受けたものの相変わらず劣悪な環境に苦しんでいるものなど、壁画の運命も人間同様です。苦悩する壁画の救済にまでいたらずとも、本プロジェクトは「そこに壁画が存在した記録」だけは残したいと思います。

右の写真は、洞窟教会に描かれた壁画の「現在 (2012年) と過去 (1990年)」を対比したものです。上段の「聖女ルチア」は近年の修復でかなり見えるようになりましたが、「聖女カタリナ」の顔は新たに吹き出した塩類の結晶でおおわれています。下段の「聖痕拝受」は、剥落が激しく、聖フランチェスコの表情はわからなくなっていました。

(宮下 孝晴)

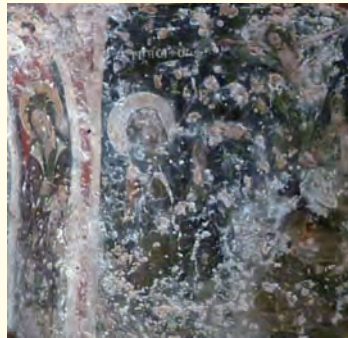


2012年撮影



1990年撮影

「聖女ルチア」(左端) 「聖女カタリナ」(右端)
マドンナ・デッラ・ブオーナ・ヌオーヴァ教会 マッサーフラ



2012年撮影



1990年撮影

「聖痕拝受」 ファヴァーナ地下聖堂 ヴェーリエ

フィレンツェのサンタ・クローチェ教会大礼拝堂での壁画調査

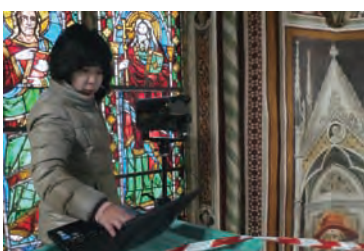
南イタリアの調査に出発する前、1月6～10日までの5日間は、フィレンツェにおいて調査テーマを異にするA～Dの4グループに分かれて、以下のような壁画調査が実施されました。

A：非接触式自動マイクロ撮影装置の活用

壁画の描画法（筆触や色の塗り重ね）をミクロン単位で、しかもダイナミックに調査し記録するためにセンターが独自に開発した非接触式デジタル・マイクロスコープの移動撮影装置を、壁面の3D スキャナ (Range5: Konica Minolta 社) と併用して、主として



追加プロジェクトで修復作業中の「聖フランチェスコの聖痕拝受」(ジョット作)を中心にデータ収集しました。(担当: 宮下明珠)



B：追加プロジェクトで修復中の壁画を検証

本学の追加プロジェクトで修復作業中の「聖フランチェスコの聖痕拝受」(ジョット作)の進行状況を記録するとともに、修復で明らかとなった後世の加筆部分

(天使から発せられた幾筋かの金色光線など)のズレをマリアローザ・ランフランキ担当修復士たちと検証しました。(担当: 宮下孝晴・宮下睦代)



C：水彩画による原寸大模写

筆触や筆勢などをフレスコ技法に近い発色の水彩画法で忠実に原寸大模写することで、ジョット (3点) やアーニョロ・ガッディ (2点) の描写法を解明する基礎資料を作成しました。(担当: 大村雅章)

D：壁画に応用された漆喰盛り上げ (ストゥッコ) と金箔装飾研究

壁画には絵筆による描写のみならず、さまざまな工芸的技法が効果的に駆使されていますが、今回は聖人の円光 (ニンプス) に施された漆喰盛り上げ (ストゥッコ) について、斜光線照射のみならず3D スキャナ (Range5: Konica Minolta 社) による精密な調査を実施しました。(担当: 江藤 望・宮下明珠)

(CおよびDは、平成23年度科学研究費助成事業で掲げた研究テーマの究明であり、Dの調査に関しては本学フィールドマネージャー養成プログラムでフィレンツェに派遣された大学院生の折戸容子さんがアシストしたことを付記します)

写真展&国際講演会

共催：大塚国際美術館／後援：文化庁、石川県

フレスコ壁画の修復・復元・保存の最前線
～デジタル・アーカイブとセラミック・アーカイブの未来～



パネルディスカッション（大塚国際美術館 システィーナ・ホール）

(1) 大塚国際美術館（鳴門市）

徳島県鳴門市にある大塚国際美術館で「フレスコ壁画の修復・復元・保存の最前線」と題した写真展（会期：2012年1月29日～3月11日）が開催され、金沢大学のサンタ・クローチェ教会壁画修復・復元プロジェクト、および南イタリアの中世洞窟教会壁画の調査プロジェクトに関する写真パネルや、映像が紹介されました。（会期中の入場者2万人）

初日には同美術館システィーナ・ホールでセンター長の宮下孝晴教授による基調講演と、「デジタル・アーカイブとセラミック・アーカイブの可能性」をテーマとしたパネルディスカッションがありました。文化庁からは栗原祐司文化財部美術学芸課長（現在、京都国立博物館副館長）と、古墳壁画対策調査官の建石徹氏、大塚オーミ陶業株式会社からは絵画の陶板レプリカ製作を開発した大杉栄嗣氏（当時は営業部長兼大阪支店長で、現在は代表取締役社長）、大塚国際美術館からは平田雅男学芸部副部長、司会は宮下孝晴センター長。システィーナ・ホールに詰めかけた200人を超える聴衆が耳を傾ける中、ミケランジェロの壁画「最後の審判」の前で、パネラーたちは白熱した議論を展開しました。



写真展会場で解説する宮下教授

(2) しいのき迎賓館（金沢市）

金沢市のしいのき迎賓館で開催された写真展（会期：2012年3月17日～24日）がオープンした3月17日、センター長の宮下孝晴教授による基調講演「壁画の修復と保存を考える」があり、第2部では、東京のイタリア文化会館館長ウンベルト・ドナーティ氏を招いて日伊両国の文化財保存に関する考え方や対策の相違について、センター長の宮下教授との対談がありました。第3部では、会場につめかけた80名ほどの聴衆全員に文化財保存に関する（AかBの）二択問題の回答者になってもらい、回答を瞬時にカウントして（AとBの）分布結果から、いっしょに文化財保存の未来を展望するという、聴衆参加型のシンポジウムが行われました。

なお、写真展には大塚オーミ陶業（株）のご厚意により、奈良県明日香村の高松塚古墳に描かれた、「飛鳥美人像」（7-8世紀）の陶板による原寸大レプリカが特別出品され、会場を訪れた見学者はオリジナルと寸分変わらぬ国宝壁画のレプリカを目で見るだけでなく、手で触れてみて触覚的にも感動していました。



特別展示されたセラミック製の「飛鳥美人」
写真は、ドナーティ館長（手前）、大杉氏（右奥）、宮下教授（左奥）



講演会場（しいのき迎賓館 セミナールーム）

研究者の横顔 第5回

精鋭デジタル計測機器軍団で中世の壁に立ち向かう

みつみ
フレスコ壁画研究センター 研究員 宮下 明珠

Q. センターでの役割分担は何ですか？

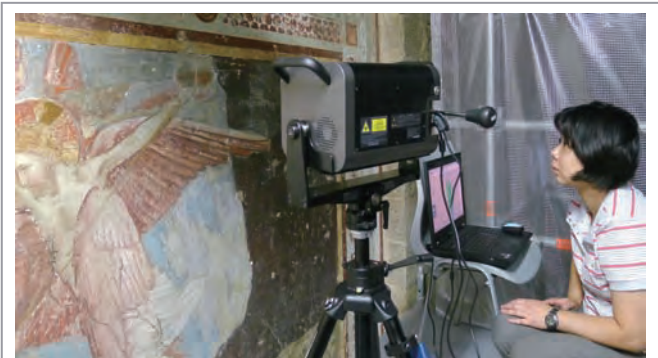
体育系サークルのマネージャーみたいなものでしょうか。個人的な選手ひとり一人がベストコンディションで戦えるようにお話をします。選手たちというのは 3D スキャナをはじめとする各種デジタル測定機器ですが、それぞれ高性能で小型の最先端モデルなので、優秀な分だけデリケートで、南イタリアの過酷なフィールドで能力全開してもらうには大変なお世話が必要です。

Q. デジタル機器の操作や管理となると、専門は理系ですか？

はい、完全理系、あるいは情報系ですね。センターの理想は「総合大学のチカラ」である文理融合型プロジェクトなのですが、日伊共同研究による学術的成果はすべてデジタル・アーカイブに集積して未来遺産とすることです。

Q. 「完全理系」のキャリアとは？

大学では、海洋調査船が採取したサンプルデータと衛星データの解析から海流とプランクトンの動きを研究していました。「海洋環境学」という分野です。大学院では、海洋環境学をいくら進めても海の環境を守りつつ、海を人間がうまく利用することができないとわかり、知識科学という立場から、どのようにしたら学



◇所属：人間社会研究域フレスコ壁画研究センター
◇専門分野：壁画表面と壁画空間の3Dスキャン、データ解析、デジタルアーカイブ構築
◇研究課題：壁画調査に適した小型デジタル計測機器の工夫

術理論や成果を社会構造の中で効率よく反映させることができるかという問題に取り組みました。

Q. それらがなぜ、壁画研究プロジェクトに・・・？

いったんは衛星データ解析の会社に就職したのですが、大きな組織の中で私に任せられた仕事は、残念ながら私の夢とはほど遠いもので、正直なところ人生の「壁」にぶつかっていたところへ、金沢大学の壁画研究センターから「壁」を調査してデータ化する仕事を手伝ってほしいと誘われたのです。

column

私のおすすめフレスコ壁画

第5回 「カスティリオーネ・オローナでのマゾリーノとの再会」

フレスコ壁画研究センター
客員研究員 宮下 睦代

コラムのテーマを「おすすめ」だけではなく、「もっとも素敵な出会い」をしたという副題を添えて、私の心に去来する無数のフレスコ壁画と向き合ってみると、ミラノの北にあるカスティリオーネ・オローナの洗礼堂にマゾリーノが描いたフレスコ壁画「洗礼者ヨハネの生涯」(1435)がすぐに心に浮かんできました。

もう10年以上も昔、コモ湖に近いカスティリオーネ・オローナの町を訪ねた時のことです。もちろん、そこにマゾリーノの壁画があることを承知して出掛けていったのですが、幸か不幸か洗礼堂内には壁画を修復するために足場が組まれていました。ここで幸運の女神が微笑んで、私は梯子を登り、足場の上でマゾリーノの壁画を、その透明感ある絵筆のタッチを間近で心ゆくまで見ることができました。

何という感動でしょうか。かつてフィレンツェのカルミネ教会界隈のアパートに長く暮らしていた私にとって、マザッチョやマゾリーノはとりわけ親しい画家でしたが、フィレンツェからこんなに遠く

離れた地で、それも彼が彩管を揮ったのと同じ足場の高さで再会できるとは思っていませんでした。足場の上での再会という偶然的演出が、私の心に忘れ得ぬ思い出を刻んだのです。



2012 年度上半期トピックス & イベント

トリノ市視察団、フレスコ復元壁画を視察

5月17日、イタリアからトリノ市の視察団が人間社会研究域フレスコ壁画研究センターを訪れました。視察団のトリノ市文化財部長ダニエル・ルポ・ジャッラ氏と、トリノ工科大学講師で建築家のアレッシンドロ・アルマンド氏は、本学の国際貢献事業 サンタ・クローチェ教会の壁画修復と学内での復元について宮下教授から説明を受け、本事業の意義を高く評価し称賛していました。同文化財部長から、是非トリノ市との交流を深めてほしいとの要望があり、和やかで有意義な視察となりました。



視察団は、国土交通省とEU・ヨーロッパ連合の、都市整備政策に関する交流事業の一環として、金沢市の歴史文化遺産を活用した町づくりの手法について金沢市等と意見交換のため来沢。金沢市内の伝統的建造物が並ぶ町並みや各施設を視察した後、本学角間キャンパス内に復元されたイタリアの壁画を視察に訪れたものです。

本センター長 宮下孝晴 教授に [石川テレビ賞]

教育文化、産業経済、美術工芸、スポーツ、社会福祉などの各分野で、地域社会の発展・向上に貢献、また将来性が極めて顕著な者に贈られる平成24年度第35回石川テレビ賞の贈呈式が、5月29日、金沢スカイホテルで行われ、本センター長、宮下孝晴教授が受賞しました。

2004年から本学と国立フィレンツェ修復研究所、サンタ・クローチェ教会の三者による壁画修復の共同プロジェクトを統括した実績、また、本センターを設立し、日伊の文化財修復事業やイタリアの研究者との交流に尽力するなど、日本におけるイタリア美術史の普及・促進活動が認められたものです。

南伊の洞窟教会の中世壁画調査プロジェクト 展示コーナーが新設!



復元壁画近くに設置した展示コーナー



ガラスケースに模写作品等を展示

フィレンツェのサンタ・クローチェ教会大礼拝堂に描かれた14世紀の「聖十字架物語」の復元壁画に隣接して側壁を設け、「テバイデ・プロジェクト」に関する最新情報を提供する展示コーナーとしました。「テバイデ・プロジェクト」とは、南イタリアの洞窟教会に描かれた中世壁画群を診断調査し、デジタル・アーカイブを構築する日伊共同の壁画遺産保存計画です。

展示コーナーの壁面は、凝灰岩の峡谷に建設された南イタリアの洞窟教会を思わせる仕上げで、壁面に取り付けられた展示ケース内には現地で制作した再現模写や、調査の方法や研究成果など、わかりやすい解説を提示してあります。

2012年度上半期 活動一覧

- 5月 第2回研究会を開催
宮下教授が石川テレビ賞を受賞
南伊プロジェクト展示コーナー新設
五十嵐教授が土木学会で発表
大塚オーミ陶業(株)と研究交流
- 6月 錦丘中、復元壁画見学
- 8-9月 南伊プロジェクト現地調査実施(グロッターリエ、パラジャネッロ)
伊ローマ中央修復研究所で文献調査
日伊ワークショップを伊で開催(文化庁連携事業)
グラヴィーナ・イン・プーリアで調査報告会を開催
宮下教授がマライーニ氏生誕百年記念講演会で講演(フィレンツェ)

2012年1月-7月の報道記録

○新聞報道

- 伊 サンタ・クローチェ教会 壁画修復 宮下教授、第35回石川テレビ賞 受賞
2012.1.1 読売 2012.4.21、5.30 北陸中日
- 2012.2.3 la Repubblica(伊)

写真展 & 国際講演会開催

- 2012.1.23 徳島
- 2012.1.28 毎日
- 2012.1.30 徳島
- 2012.3.15 北陸中日
- 2012.3.18 北國、北陸中日
- 2012.5.11 大学受験パスナビ(旺文社)

○TV報道

- 伊 壁画修復プロジェクト「眠れる壁画の美女」
2012.1.28、5.26 テレビ金沢
- 宮下教授、第35回石川テレビ賞 受賞
2012.5.20、5.24、5.29 石川テレビ

Report 南イタリアの青空に気球を上げて



祈りと修行の場を南イタリアの新天地に求めたビザンティン帝国からの修道士たちは、天然洞窟を利用したり、凝灰岩台地を掘って教会を建設して壁画を描いた。今から 1,000 年も昔のことである。やがて洞窟内の聖なる空間は地域の需要に応じて拡張されたり、汚れた壁画の上に漆喰を塗って新たな壁画が描かれたりして発展的展開を遂げたものもあれば、住む者もなく荒れ果て、峡谷の崩落で洞窟が埋まったり、付近農民の納屋や家畜小屋などに転用されてしまうこともあった。また、都市の発展にともなう石材供給源として、洞窟教会周辺の凝灰岩が広範囲に切り出されてしまうこともあった。洞窟教会とその周辺のロケーションは、歴史とともに少なからぬ変貌を余儀なくされてきたのである。

洞窟内に描かれた壁画調査だから洞窟内に潜り込むことだけに躍起となっていたが、昨年 9 月に実施した第 1 回の本格調査を終えて気がついた。荒涼とした峡谷に点在する洞窟教会と壁画に注目するだけでは、洞窟教会が生きていた時代

的確に把握することはできないと。決して「神の目」を求めろわけではないが、

少なくとも「鳥の目」で上空から一帯の地形を知りたい。セスナ、ヘリ、小型ラジコンヘリなどの方法を検討した結果、最終的にヘリウム気球に取り付けた小型カメラをラジコン操作して空撮する方法を選択、角間キャンパス内で何度かのテスト撮影を行い、かなりの手応えを感じることができた。本年 9 月の第 2 回調査から金沢大学チームの新兵器として、南イタリアの澄んだ青空に浮かぶ。

連載 フレスコ八景 第五景

額縁に入った絵をタブロー画という。好きな部屋に持って行って壁に釘を一本打ちさえすれば、部屋の雰囲気を変えられる移動可能な室内調度品という定義も可能であろう。この言い方を壁画に適用すれば、壁画とは建造物の壁そのものに直接描かれているので、絵だけを移動することは不可能だが、その部屋の空間を現実のスケールで「だまし絵」的に演出することができる。

14 世紀の初め、パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂で、ジョットは紙芝居の絵を順に横並べして「聖母マリアの生涯」と「キリストの生涯」を時間的配列で展開した。14 世紀の末、フィレンツェのサンタ・クロチェ教会大礼拝堂で、アーニョロ・ガッディは異時同画の手法を活用して数場面を同一の画面枠の中に統合し、遠くからでも効果的に見えるパノラマワイド画面で描いた。そして、15 世紀の初め、ブルネッレスキによって幾何学的な透視図法が発明されると、室内の壁画空間はヴァーチャルリアリティの追求へと大きな歩みを進めることになる。

フィレンツェのカルミネ教会ブランカッチ礼拝堂にマザッチョが新時代の到来を告げる「聖ペテロの生涯」を描いてから 30 年、マザッチョの影響をもっとも強く受けたフィリッポ・リッピは、フィレンツェの隣町プラート大聖堂後陣に「洗礼者ヨハネの生涯」（右側壁 3 段）と「聖ステパノの生涯」（左側壁 3 段）を描いた。

掲載した写真では小さくて見にくいかもしれないが、フィリッポ・リッピは壁画空間の新たな進化を試みている。コの字型礼拝堂の右側壁は横長ワイド画面だが、それと直角に交差する窓側左方の小さな壁面も、連続した空間を再現するために利用されている。つまり、コーナーから生まれるリアルな迫力に注目！左側は牢獄の前。斬首した洗礼者ヨハネの首を【ここで私たちの視線は右側壁に移動して】刑吏が髪をつかんで宴会場からやってきた侍女の盆に載せる場面から、さらに右方へ展開し、「ヘロデ王の宴席で踊るサロメ」の場面に連続する。（宮下孝晴）



Photo: Takaharu Miyashita
ヘロデ王の宴席で踊るサロメ

表紙：サン・レオナルド教会壁画(マッサーラ) 撮影：宮下 孝晴

Centro
Affresco



金沢大学 フレスコ壁画研究センター ニュースレター (年 2 回発行)
編集発行 金沢大学フレスコ壁画研究センター
〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学人間社会研究域
電話 (076)264-5550/5472 E メール fresco@ed.kanazawa-u.ac.jp

<http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/fresco/index.html>

定期的にニュースレター郵送をご希望の方は、お名前ご住所と連絡可能な電話番号または e-mail アドレスを添えてご連絡ください。

本ニュースレターの内容を無断転載することを禁じます